

「愛顔(えがお)あふれる愛媛づくり」

平成27年度「知事とみんなの愛顔(えがお)でトーク」知事講話

開催日時：27.6.8(月)

開催場所：愛南町御荘文化センター

どうも皆さん、こんにちは。今日はさまざまな分野で、宇和島圏域の市、町で活躍されている皆さんとの「愛顔でトーク」ということで、皆さん大変お忙しいところだと思いますけれども、ご出席していただいたことにお礼を申し上げたいと思います。名前のとおり「愛顔でトーク」ですから、ちょっとまだ皆さん硬い表情ですので、ニコニコしながら前向きな議論ができたらと思いますので、よろしくお願ひします。

【県の施策の3つの柱】

愛媛県は、さまざまな課題がありますけれども、特にこの南予地域におきましては、南海トラフの発生に伴う対策が多くの方々のご関心事だろうと思います。今、愛媛県では3つの大きな施策の柱を立てているのですが、その一番が県民の生命、財産を守るという防災災害対策であります。2つ目が、深刻な事態をこの国全体にもたらすであろう少子高齢化に伴う人口減少問題。3つ目の柱が、地域が成り立っていくためには最低条件必要欠くべからざる条件として取り組まなければならない地域経済の活性化。この3つを愛媛県政の主要柱として施策を展開しているところでございます。特に、災害防災対策というのは、地域ごとにその特性にあった対策を講じていかなければならないテーマもありますし、共通して取り組むべきテーマもあります。例えば、共通して全県下で取り組んでいたのが、いざというときに避難場所等にも活用する、そして子どもたちの命を守ることにともながる県立高校の耐震化の問題でございました。残念ながら愛媛県は、県立高校の耐震化率が全国47都道府県で、順番でいうと47番という状況でございました。5年前、最初にこの問題に取りかかったときの耐震化率が48%ぐらいでありました。これは財政が厳しくても最優先で進めていこうという方針の下で、今、取り組みを進めております。今年の3月の段階で、48%が82%まで上昇しております、今年ようやく47位を脱出しまして、それでもまだまだ45位であります、急ピッチで、平成29年度末までには100%までもっていく段取りを計画的に進めておりますので、こういったことは全県下の課題でございます。

【自主防災組織の整備】

もう1つ全県下の課題として取り組んでいるのが、大災害のときはそれぞれの地域にある消防局、消防団の皆さんが同時に全ての被災地に駆けつけることは不可能なことでありますし、大きな地震災害を経験した地域の実例によりますと、初動の体制における最大の力は隣近所の助け合いだということが明らかになっております。前の仕事の松山市長時代にこのことを徹底的にやろうということで、全地域に自主防災組織を結成し、自主防災組織にそれぞれ防災士という資格取得リーダーを誕生させ、そして通常の訓練を通じていざというときに備えようということに力点を置いてまいりました。その結果、松山市では防災士の資格取得者が、全国市町村が今1,800ありますが、全国1位の人数になっております。県の仕事をいただいたので、これを全県下でやろうということで、市町と協力しながら、

今、急ピッチで防災士の育成に歩を進めているところですが、現在のところ愛媛県では6,000人ぐらいの防災士の方が誕生していきまして、この人数は47都道府県でいうと、東京都、大分県に次いで愛媛県が第3位になっております。例えば、この会場のある愛南町。数字を見てみたのですが、自主防災組織の結成率は実は愛南町は100%になっています。地域ごとに自主防災組織が結成されているのですが、実は大きな問題がありまして訓練の実施率というのがあります。つくってはいるのですが、実際訓練したかどうか。県下でいうと自主防災組織の組織率は平均すると92.7%になっていきまして愛南町が100%。平均を上回っている。ところが問題は訓練率でありまして、県下の自主防災組織の訓練実施率が平均でいうと41%ですが、愛南町は7.2%です。つくったけど実際動いていないという状況でありますから、いろいろな課題があるということでございます。

【緊急避難路の整備と高速道路延伸】

また、宇和海は当然のことながら、東予、中予と違って津波の心配をしなければなりません。このことについては建物が壊れても後から取り戻すことができるけれども、人の命は取り戻すことはできないということで、宇和海の5つの自治体の市長、町長に話をしまして、2年間で一気にやりたい。それは緊急避難路の整備でありました。集落ごとにとにかくそこに逃げるということで、緊急の避難路をきめ細かく整理しましょうと。道をつくるのは時間がかかりますから、とりあえず最低限の課題として緊急避難路の整備をしたいということで、これは市町協力事業として行うことができまして、2年間で352カ所を一気に整備しましたので、人の命をとりあえず救うだけの緊急避難路の整備が完了しました。

しかし、これはあくまでも初期段階でありますから、当然のことながらそのあとの避難をどうクリアしていくのか。もっと言えば、これは長いスパンになります。特に四国の場合は高速道路がつながっていないという弱点があります。愛媛県には、あまり聞きなれない言葉ですが、“ミッシングリンク”という言葉があります。リンクがなされていない。そういう課題を持っている道が3つあります。1つは、大洲・八幡浜道路。佐田岬から大洲へ抜ける道路でありまして、当然のことながらここは大規模な避難をするときには道が1本しかないので大渋滞が発生しますので逃げられないという課題を抱えていますから、大洲・八幡浜道路の完成が急がれる。もう1つは東西南北の物流支援体制の強化も含めて必要とされているのが今治・小松自動車道。これは広島からの応援が来たときに、ここは高速道路がリンクしていませんので途絶えてしまうわけでありまして、ここも大きなミッシングリンク。そして最大のミッシングリンクが四国8の字高速道路の愛媛県から高知県に向かうルートです。とりわけこのルートは今現在ご案内のとおり、国道56号線1本しかないということですから、今でも高潮で交通止め、集落が孤立する状況が生まれています。四国のミッシングリンクが解消されない限り、高速道路自体の扉は開かれないということ合言葉にして、最優先の課題として突き付けているところではありますが、ご案内のとおり、去年は宇和島まで開通いたしました。そのあとの津島道路についても着々と進んでいるところですが、さらに並行して次のルートに入っていかなければ意味がないということで、現在は宿毛までの工事实施について折衝や打ち合わせを重ねているところでございます。先般、高知県ともそのルートについて合意がなされましたので、次なるステップに入っていく時期がようやく迎えられるのではないかと思います。先ほどの愛南町の地理的な条件を考えた場合、そしていざというときの避難場所にもなるという有効性、さらには災

害が発生したときに物流の供給力の向上という点においても、是が非でもこれを進めていかなければならない最優先課題として捉えているところでございます。

【土砂災害への対応】

また、去年は広島のほうで土砂災害という新たなテーマが突き付けられました。これは同じ土壌を持っているのは今治あたりの地域になりますが、違う土壌でも緩やかで土砂災害が発生する場所は愛媛県下に数多くあるわけでありまして。しかし、土砂災害の対策というのはダムと同じようにお金と時間がかかりますから、すぐに対応できるものではない。ということで、今、研究しています。土砂災害でも元をたどっていくと本当に小さいところから始まっています。雪だるまのように転がりながら膨らんでいって、大規模なものにつながっていくという構造になっていますから、元のところで初期段階で抑える機能を持たせれば、そもそもその発生を押さえることができないのではないかという分析をして、それを基に安価な木材を使った小型の砂防ダムをつくっていったら効果があるのではないかということを今、研究しているところであります。効果が実際に証明できる場所を検証しているところでありまして、検証作業が終わった段階で一気に木材を使ったダムの設置に入っていきたいと思っております。事程左様に防災災害対策というのは、多岐にわたりますし、すぐにできるものもあれば長い時間を要するものもありますので、ゴールなき課題ということで、最優先課題という位置付けの中で、進めていきたいと思っております。

【南予の地域経済活性化】

もう1つの課題について触れてみたいと思います。地域経済の活性化でございます。とりわけ南予地域というのは、この問題は非常に大きなテーマだと思います。東予のほうは、ものづくりの工場群がずらっと並んでいますから、取り組みのしようが全く異なることもありますし、中予の場合は松山市を中心に商業都市としての機能がありますので、これも取り組みの方向が違ってくると思います。南予の場合は、何と言っても1次産業をどうするかにかかっている。1次産業にとどまることなく、加工品も含めた6次産業化も含めて、1次産業を基にした展開をどう組み立てていくかということが最大のテーマだと位置付けています。ただ、自信を持っていただきたいと思うのは、今年に入って南予地域に3つの工場の誘致に成功しました。これは2年がかりくらいでアプローチしていたのですが、やみくもに工場来てくださいと言っても来ないと思います。それは物流コストの面や地理的なハンディがある。高速道路が通じたのでだいぶ変わってくるとは思いますが、競争の原理からいうと非常に厳しい。ではどうすればいいかというと、1次産業とリンクした工場ということに狙いを定める。いわば食料の加工品であるとか、こういったことになると、旬な素晴らしい素材をその場で生かせるということにつながるのではなからうか。そんな発想でありました。

【魅力ある南予の1次産業】

第1弾は宇和島のほうに日本最大の和菓子メーカー、岡山に本社がある“源吉兆庵”という世界に展開している会社であります。本社へ行ったときにお話をしたのが、その和菓子メーカーが求める品質をその場でつくることを地域の皆さんと協力してバックアップしましょう、その品質基準をクリアしたらしっかりとした値段で買ってください、という話になったんですが、ある県との取り合いになりましたが、愛媛県のほうを選んでいただきました。それは柑橘であるとか、ビワ、モモ、これは松野町、鬼北町を含めた供給体制

を取るということで、非常に興味を持っていただき、宇和島のほうに工場の進出を決定してくれました。2つ目は京都が本社で、京都でどんどん成長している化粧品の会社だったのですが、たまたま出身が愛媛で、これもある県と愛媛県とどっちにするか悩んでいる状況でありました。とどめを刺したのが柑橘は化粧品にすごくいいんだそうです、これだけの豊富な柑橘で、みかん研究所がバックアップして、商品開発にも協力しましょうとアプローチしましたら、やはりふるさとということもあったのですが、工場を松野町に出しましょうということで、松野町と連携してアプローチして誘致が決まりました。もう1つは西予市ですが、こちらは食品加工、コロッケなどの食品加工の大手メーカーの工場ですが、これも地元のイモ、肉といったものとリンクして製品化していこうということで、こちらの工場の誘致も今年に入って決まったところでもあります。南予は工場は無理だろうという意見が結構多かったのですが、やり方によっては十分可能な、そしてそれが可能とならしめる素材があるという自信を持っていいのではなかろうかと感じたところでございます。

柑橘1つ取っても、愛媛県は量、質、種類共に他県を圧倒する豊富な種類を誇っています。今日も午前中にせっかく愛南町に来たので、河内晩柑をつくられている若い方の農場に行ってみましたが、それはそれは苦労しながら品質を追い求めて、ビジネスとして成り立つような経営をされていることを知りました。今日提供していただいたものはこれぞ河内晩柑という本当においしい味が出ていましたし、この味を常時供給できれば、ある程度の高値で購入者をまとめられるなど自分自身も感じたところでございます。そのあと、愛南町といえば“びやびやかつお”でありますから、深浦漁港のほうへ行きまして、今日は当たりでありまして、びやびやかつおを食べさせていただきました。これは別物ですね。とったかつおをすぐ船の上で血抜きしてすぐさまスラリーアイスで凍らせて、7時間以内に提供するといういろいろな条件が付いているもの、それだけがびやびやかつおの命名を与えられていますが、食べた瞬間、今までのかつおの概念が飛んでしまいました。これはここでしか食べられないと思いましたが、たたきでは満足できないというくらいの別物の味に本当に驚かされました。こうした素材というのは、かつおのみならず、勝手に命名させていただきましたが、愛育フィッシュの宇和海全域でつくっている養殖の魚にも相通ずるところもあります。タイの生産は日本一と言っても、同じタイでも宇和海のタイというのは、作り手によってキャラクターが違う。餌のやり方やいけすの周辺の工夫で味や身の感覚が違ってくる。そこに愛媛県の魅力があるのだらうと思います。そして、今、水産研究センターのほうでは、さらに漁業を収入につなげようということで、新しい魚種の開発にも積極的に打って出ているところでもあります。最近是非常に高価なハタ、クエといった品種の開発にも入っていますし、来年にはいよいよスマの出荷が可能になるのではなかろうかと思っています。このスマは全身トロのようなカツオとマグロの間ぐらいの魚になりますが、品種変更に伴って、全身、トロ成分が取れるようになってまいりました。決定的な違いは、マグロのように40kg、50kgではなくて、2kg、3kgのサイズで出せるということでもありますから、いわば小売店でも扱いが可能になるということで、販売チャンネルの裾野を広げることができるだろう、さらにマグロ全体が世界的な漁獲制限に入ってきておりますから、近大マグロあるいは愛媛県のマグロをはじめとする養殖のマグロのニーズが今後必ず高まっていく。そういうことを含めて安定的な価格で提供できるものを漁業者の皆さんにお示しすることによって、収入につなげていこうという取り組みの視点で

考えていただければいいのではないかと考えています。

【県営業本部の活動】

一方で、いいものをつくっても売れなければ収入にならないわけであります。ここが愛媛県の一番弱いところであります。これは1次産業だけではなくて、ものづくりにしてもそうであります。東予にある紙パルプ、あるいは造船、タオル。造船はちょっと別格ですが、その下にはものすごい技術を持った中小企業がたくさんあります。でも、中小企業であるが故に技術はあっても営業力はない。これは1次産業の構造と全く一緒であります。そこで、愛媛県として4年前から展開し始めたのは、県庁を商社化するという事で、営業本部という組織を立ち上げました。県の営業本部が、本来、農協や会社がやるべきことですが、営業力が弱いということでそれを買って出ようと愛媛県が新規の販売先を開拓し、そこに乗っかっていただくことによって、皆さんがチャンスを得るということであります。ただよく誤解されるのですが、我々は実際に自分たちがビジネスをするわけではない、土俵づくりだと。例えば中小企業が大手に行くとはほとんど名刺を受け取って終わりですが、愛媛県が間に入ることによって、向こうもしっかりと対応して話を聞いてくれる場所ができる。いわば信用力を愛媛県の名前でカバーするという事に狙いがあります。ですから、営業の補助エンジンという位置付けで受け止めていただいたら分かりやすいのではないかと考えています。ただ、実際ビジネスはやらないということではありますが、愛媛県としても実績をつくらなければならないということは全く同じでありまして、現在のところは県下の営業部隊に対しては、訪問件数、愛媛県が主催した商談会の回数、そしてその商談会で生まれた新規のビジネスの売上高、制約高を四半期ごとに報告する体制をとっています。1年目はヨチヨチ歩きでありましたから愛媛県の商談会で生まれたビジネスは8億円ぐらいでした。2年目が27億円のビジネスにつながっています。今年の3月に締めた3年目は一気に56億円まで増えました。今度の目標は100億円のサポートをするということでもありますから、これは国内だけではなくて海外にも進出していく必要があります。海外の国ごとに分析を行って、国ごとに何を商品として持ち込むか。受け入れ体制が全然違ってきますので、誤りのないチャンネルをつくるのが県の仕事でありますので、そんなところから愛媛県産品が流れていくようなルートがつかればと考えています。

2週間前にマレーシアの元首相のマハティールさんが来県されましたが、これも全部その一環であります。来年の1月にはマレーシアの首都のクアラルンプールというところで愛媛フェアを実施する予定であります。このときにマハティール元首相を、言葉は悪いですが引きずり込めるかどうかによって人脈の広がりがからりと変わってまいります。そんな狙いもあって、いろいろな方々のルートをたどりながら、せつかく日本に来るならプライベートで愛媛に立ち寄って欲しいという依頼をずっとしていたのですが、それが実現いたしました。東予、中予、南予、全部見てもらったのですが、それぞれ皆さん、趣旨を受け止めていただきまして歓迎してくれまして、愛媛の大ファンになって帰って行きました。帰りは飛行機の貨物室に入りきれないくらいのものを買って、多くの宣伝をマレーシアにしてくれるのではなかろうかと思っております。

【少子高齢化対策・温もりのある移住政策】

最後に少子高齢化でございますが、これは特に南予では常に話題になっていると思います。どうすればいいかの答えはありません。出生率をどうすれば上げられるか。若者に来

てもらうためには雇用が必要でありますから、産業をどう強化していくのか。そして、実際に来てもらっても第1子、第2子を安心して産み育てる環境ができるかどうか、さまざまな課題がございます。しかもこれは全国一斉に行われている話であります。

先日、驚いたニュースが流れてきました。先週ですかね。東京で行われた創成会議で東京都からは、じいさん、ばあさん出て行け、というとんでもない、ビックリしますよね。行き先の候補としてこんなところがありますという中に愛媛県では松山市と新居浜市が入っていました。我々はいいです、来ていただくと人口が増える。年齢は関係なく、若い人でもいいですし、お年寄りでも来ていただくことがいろいろな地域の活性化につながるから大いに結構なのですが、ふと考えたのは東京のおじいさん、おばあさんはどう受け止めたのかなということでした。余計なお世話だと思われるかもしれませんが、要はあなたたちはいないから出ていけと言われるわけです。昔の物語であったじゃないですか、“姥捨て山”とか。あれを連想する言葉を平然と言えるというすごさを感じたのですが、外から人に来てもらうというのは、お年寄りであれ、若い人であれ、Iターンであれ、Uターンであれ、いろいろな施策を展開して愛媛に来てもらうような手立てをしていかないといけないと思っています。

【自転車を活用した観光振興】

もう1つは、ファンをつくるための観光も重要であります。先ほどの地域活性化にも結び付きますが、とりわけ、今、サイクリングというものを活用した展開をしているところですが、昨年はその第1弾としてしまなみ海道に焦点を当てた世界大会の開催をしました。最初は今治の島しょ部の皆さんも「知事、これはどうなるんかね。人来るんかね。来てもお金落としてくれるんかね」という話ばかりだったのですが、そんなことはない。まず来ないとチャンスは生まれません。来たときにいかにこれだけいいものがあるという情報発信ができるかどうか。その情報発信が来た相手に届いたときに、立ち止まって消費行動が生まれて活性化につながっていく。そういうふうに変えていただけたらいい。自分たちが動くという発想になってください。指くわえて待っていてもサッと素通りされて、言われるとおりの何も買いません、というようなどころからのスタートだったのですが、途中から自主企画イベント、こういうことがやりたいということがどんどん生まれて来て、我が事のようになってきました。今はおかげさまで土日、ものすごい人が来るようになりました。これは今治のためだけにやったわけではなくて、今治にはしまなみ海道がありますから世界に情報発信ができる、来てみたら、愛媛県の東予にも南予にも面白いところがたくさんあるという情報をどう来た方々に伝えるか。南予は特に道路が整備されているけど、人口が少ない、車が少ない悩みがある。それは逆転の発想で見れば、自転車に乗る人には最高なんです。そんなアプローチをして、今、全県下で進めようとしています。今年は11月15日に“愛媛サイクリングの日”というものを設定させていただきました。この日は、大きくても小さくてもいいです。ほかの県がやらないことをやることによって情報発信ができますから、全ての市町で小さいものでもいいし、大きなものでもいいけども11月15日のサイクリングの日は、全ての県下の市町で何らかの自転車のイベントをやっていく。どこの県もやったことのないことをやると全国への情報発信につながるという発想でのアプローチでありますので、すぐに結果が出るというよりは、しまなみのようにじわじわとファンを増やして地域の活性化につなげていこうという機運がぜひいろいろな地域で

生まれてくれればということを心から願っております。

ちょうど30分たちましたので、私の皮切りのあいさつはこのへんで終わらせていただきますが、これから2時間お付き合いいただきますようお願い申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。